
置き去りにされても

西野そら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

置き去りにされても

【Nコード】

N2274F

【作者名】

西野そら

【あらすじ】

2003年の就職氷河期真っ只中。最後に受けた小さな町工場で、僕はようやく就職先を確保した。大学を出たというのに、就職できたのは半分程度。悲惨な状況の中、なんとか掴んだ就職は、果たして正しい選択だったのか。僕は就職からしばらくして、考えるようになった。現実という魔物に追い詰められて、最後に引いたのは貧乏くじ。それに気づいたところで、何かできるわけでもなく。僕が歩んでいく道は、将来へつながっているのか、自問自答する。

第一節 キャンパスの悲惨

景気という見えない生き物に、僕は飲み込まれた。

氷河期という言葉は聞き飽きた2003年の夏。

僕はようやく、小さな町工場に仕事を見つけた。

田舎道の行き止まりにあるスクラップ置き場。

賞与どころか、定期昇給もない。

毎月の給料の支払は翌月払い。

自転車操業状態の会社だったけれど、無職になるのが怖かった。

まだ就職できただけでもよかった。

大卒の平均就職率が55.1%を叩き出した空前の就職難。

東京でも苦しいというのに、こんな地方都市はその比ではない。

夏を過ぎてても、キャンパスにはリクルートスーツが溢れていた。

教室にも、図書館にも、学食にも。

何度も書き直した消しゴムの残りがすが、食堂のテーブルに置き去りにされていた。

生協の書店には、就職活動本が平積みになっていた。

夏を過ぎる頃には、就職戦線の行き詰まりと対照的に、書棚のポツプアップが華やかになっていく。

他人の不幸は格好の商売機会。

皆様のためと謳う生協でも、結局は営利のためには手段を選ばない。突き刺さるような感覚に耐えられなくて、僕は書店を後にした。

大学の卒業式は、僕にとっては切なかった。

地方では県庁や市役所に入った者は勝ち組。

一生を保障された人の顔は、それは晴れやかで、僕はなんとなく合わせる顔がない。

そそくさと会場を後にした僕は、一人家路を急いだ。
今日から切り替えるしかない。

地味でも、仕事があるだけまだいい。

僕の生活がたとえ不幸であっても、誰にも迷惑を掛けることはないのだから。

4月が来る前に、僕は会社に通うようになった。

僕の仕事は、会社の事務をする人がいなくなった欠員補充。

止むに止まれぬ事情とやらで、急に退職してしまつたらしい。

引継ぎも何もなく、残された書類と社長の記憶だけが頼りの仕事始め。

「こんな会社で大卒が来る時代になつたか。」

会社の先輩に言われた最初の言葉が、これだった。

確かに休みは日曜日だけで、給料も税金や保険を引かれたら、手元に残るのは10万円。

アルバイトのほうが、よっぽど待遇はいいけれど、不安定な仕事よりはいい。

言われたことだけのアルバイトより、少しくらい自分で何かやれるほうがいい。

しかも、小さな会社は、会社全体の見通しがいい。

今何が起きていて、何が問題で、何をしなければいけないのか。

小さなプレハブ小屋で始めた僕の仕事は、こんな滑り出しだった。

第二節 小さな会社の現実

錆びた鉄の匂いが、学生気分を拭い去る。

怒鳴り声や一円を巡る押し問答が、嫌でも耳に入ってくる。

ここでは、僕が勉強してきたことは、何一つ役に立たない気がした。教科書に答えがある問題集とは違う。

ここには、生活がかかった人たちの生きた問題があるだけ。どこにも答えはない。

黙っていれば、不況の波に飲まれるだけ。

誰も助けてはくれない。

「生きるためには手段を選んではいけない。」

僕がいつも、社長から聞かされる台詞だ。

僕の席は社長の隣で、いつも小言をBGMにしていた。客を見て値段を決める。

社長はそう言い切っていた。

だから、社長の口から出る嘘や方便を、僕は仕事をしながら黙って聞いていた。

僕が入社にあたって約束させられたのは、誓約書の提出でも就業規則の遵守でもない。

「俺の背中を見る。そして、余計なことは喋るな。」

それだけだった。

そんなに人と喋るのが好きではない僕は、会社の中でも静かにしていた。

僕の周りでは、入れ代わり立ち代り社員が来ては、愚痴をこぼしていく。

Tシャツ一枚で、現場と事務所を往復する社長の姿も、僕は横目で見ていた。

黙って仕事をしている僕に、声を掛ける社員は少数で、僕の存在は極めて透明だった。

最初は商談をする場所を選んでいた社長も、次第に僕の目の前で堂々とするようになった。

僕の口が堅いことを知って安心したのだろうか。

次第にシビアな話を、僕に聞こえるような声で話すようになった。

プレハブ小屋は、学校の教室と違って、本当に暑い。

4月の上旬はまだいいほうで、ゴールデンウィークの頃からは、一気に直射日光がきつくなる。

盆も正月も休みもほとんどない職場に、僕はようやく慣れ始めたけれど、暑さだけは我慢できない。

ネクタイにスーツで頑張ってきたけれど、周りを見れば繋ぎの男ばかり。

一応新入社員としては、スーツは欠かせないと思ったけれど、さすがに汗が止まらない。

「お前、いい加減ネクタイ外したらどうだ。」

見るに見かねた社長は、僕のネクタイを掴むと、そのまま首筋から引き抜いた。

やはり、スーツを着て仕事するような場所ではなかった。

社長にも怒られたけれど、社長は笑っていた。

ネクタイを取って、Yシャツの第一ボタンを外した。

首筋から体温で暖められた蒸気が拭き出した。

代わりに、生暖かい風が、体の中に吹き込んでいく。

服の中の温度に比べたら、まだ外の風のほうが涼しい。

冷房でもないのに、こんなに涼しい風を体験したのは初めてだった。

「ほら、使えよ。」

まっさらな白いタオルと団扇を、社長が手渡してくれた。

お礼を言って、早速使わせてもらうと、顔拭いたタオルは脂汗で茶

色く変色していった。

次の日から、僕はTシャツにジーンズで通勤することにした。何だか遊びに行くような格好だけれど、洗濯やアイロンの手間が省けて助かった。

プレハブ小屋の事務所に入ると、社長は驚いた表情をしていた。

「なんだ、急にこの場所に染まったな。」

そう言うのと、また目の前の帳簿に目を落とした。

会社を動かすというのは、とても大変なことだった。

給料を払って、役所に手続きをして、収支を合わせる。

今までアルバイトはしたことあるけれど、給料は口座に振り込まれていた。

いつも数字を確認するだけだったけれど、それは誰かが振り込む仕事をしていたということ。

僕はようやく、社会の仕組みの一部を知った気がした。

お金は天から降ってくるわけではなく、誰かの努力で動いていることを。

給料とか、休みとかは別にして、ここで仕事をしてよかったと思えた。

第三節 厳しい同期の惨状

自分がやっている仕事に誇りを持つというのは大変なこと。

社会に認知されて、責任を負いながら、お金をもらって全うする。

それを僕は、ここで初めて知った。

どんなに地味で泥臭い仕事でも、積み重ねが信頼を得る。

それが大人の仕事なのかもしれない。

知識ばかりで、実感を伴わなかった労働という意味を、僕は考え始めていた。

そんな折、大学の同期で集まることになった。

セツトされた時間は土曜日の午後6時。

同期の多くが土曜日は休みだから、夕方に集まるのは簡単だった。

けれど、僕にとって土曜日は仕事。

夕方6時に終わるかどうかもわからない。

とりあえず、出席することにはしたけれど、遅れていくことになりそうだった。

毎日社長の隣で仕事をしていると、次第に話をするようになる。

伝票の処理もようやく早くなってきたし、毎月の給与の支払いも慣れてきた。

社長は公私の区分が緩やかな人で、仕事中でも家族の話をする。

息子の進学の話から奥さんに残す遺産の話まで、僕は聞き役だった。この会社は、社長が一代で作った会社だけれど、息子に譲る気はないらしい。

息子も会社なんてやる気はなく、一代で終わりというのが社長の口癖。

本当は跡継ぎがあれば嬉しいのだろうけれど、そういうわがままを子どもには押し付けない。

それが社長の美学というのが、これもまた口癖。
ちよつとした漫談を聞いているようで、なかなかこれが面白い。

僕もその勢いに乗って、今度の同窓会の話をしてみた。
社長は、仕事を適当に切り上げて行くように指示した。
別に業務命令でもないけれど、行くのが礼儀ということらしい。
ただし、僕にこう忠告した。

「行って、シヨツクを受けるな。」
考えてみれば、僕の同期は役所や銀行に入った人も少なからずいる。
そういう連中と仕事の話になれば、負い目を感じるかもしれない。
そういうことだと、僕はすぐにわかった。

宴席に行くと、やっぱり話題は仕事の話になった。
大きな組織に入った人は、春は研修の季節で、現場に出ることは少ない。

研修所に缶詰めだった人もいれば、職場で恋愛が始まった人もいた。
総じて、学生のような勝手気ままな生活から仕事中心のまじめ生活に慣れてはいない。

それでも、仕事帰りに飲み会をしたり、合コンをしたりと、それなりに楽しい生活をしているらしい。
もちろん仕事でも、窓口で怒られたこともあれば、電話で失敗した人もいた。

みんな着実に社会人としての一步を踏み出していた。

一方、僕の状況といえば、毎日同じことの繰り返しで、劇的な変化はない。

小さな会社に入った人はみな、毎日限界まで働いていた。

僕の状況はまだいいほうで、又聞きだけれども、就職浪人している人たちも苦戦しているようだった。

そのまま活動停止で、家に閉じこもってしまった人もいるし、派遣

会社に登録した人もいた。

仕事へのプライドを捨てられないで、社会を捨てていく人。

仕事への執着心を優先して、不安定な雇用に流れていく人。

人それぞれの人生だけれども、如何ともしがたい状況に変わりはない。

こうして今日、出てこられる人はまだいい部類。

派遣やアルバイトの毎日では、合わせる顔がない。

そんな人たちのことを思うと、今日のお酒は、あまりいい味がしなかった。

週が明けて、僕はこの話を社長にしてみた。

社長は黙って、僕の話聞いてくれた後、社長なりの解釈をしてくれた。

「自分で仕事は選べない。希望した職の中から、仕事が自分を選んでくれる。」

確かに、今の仕事だって、僕の希望した職の中で、順位は一番下だった。

嫌われ続けてようやく、今の仕事にありついた。

よく考えてみれば、僕は何を希望していたのか疑問になった。

してみたい仕事と言えば、自分が業界研究した仕事の中から選んだだけ。

世の中には、今の僕のように、知らなかった仕事如山ほどある。

だから、僕が選べる仕事なんて、世の中にある仕事のほんの一部しかない。

その一部の中から、選んでもらうのを待つ。

それが就職活動なのだと思う。

第四節 僕なりの努力

夏が来て、世間ではボーナスの季節を迎えた。けれど、僕にとっては雑音以外何者でもない。

ボーナスが出ない人にとって、公務員のボーナス平均額を教えられても困る。

それだけ自分が能力がなかっただけで、今さら妬んだり僻んだりしても仕方ない。

こういう社会状況は、誰でも同じ条件なのだから、その中で公務員になった人は優秀なのだと思う。

ただ僕にはその能力がなかっただけ。

力がない奴は、こうして底辺の生活を歩むのは、自由の代償だと思う。

職業を選ぶ自由があると引き換えに、厳しい生活に陥る可能性もあるということ。

ただそれだけのことを、僕は実体験してわかった。

公務員試験の予備校に通い、必死に面接の練習をする。

今頑張れば、将来は明るい。

それは不況になればなるほど、鮮明になる。

公務員になれば、将来が保障される。

大手企業に入れば、高給が保障される。

優秀な人は、ステップにして転職活動をするかもしれない。

けれど、普通の人には、一旦入れば辞めることはない。

だから入ることに、こんなに苦労する。

やっぱり差がついたと思う。

給料の面でも、人間関係の面でも、そして仕事のスキルの面でも。今になって、浪人してでも、いい会社に入ればよかったと思う。

実際に入れるかどうか分からないけれども、頑張ればよかったと思う。

何年でも公務員試験を受け続けて、チャンスを待てばよかったと思う。

なのに僕には、その甲斐性がなかった。

我慢もできなければ、努力もできない。

ただ、現状ある選択肢の中から、貧乏くじを引いてしまう。

それが僕という生き方なのかもしれない。

僕には引つかかっていることがあった。

「今努力できない人間は、将来何に対しても努力できない人間になる。」

中学校三年生のときに、担任の先生が受験勉強に発破をかける言葉だった。

確かに僕は、そのとおりの生き様になってしまった。

毎日汗まみれの職場で、慣れない手書き伝票を書く毎日。

本当なら、高卒の人が来る職場らしいけれど、僕はそれでも就職を選んだ。

裏を返したら、高卒の人の仕事をひとつ、奪ったことになるのだけれども。

それだけ僕も必死だったのだと、今は自分を慰める。

何も選べない状況で、四の五の言っていられない。

明日食べていくために、仕事は必要。

その仕事は、どんなものであったとしてもかまわない。

そついう近視眼的な選択が今、自分の将来を苦しめている。

考えてみれば、初任給はともかく、一生この給料でやっていくことはできない。

結婚して子どもを育てるのに、年収200万円ではとても足りない。僕の選んだ道は、世の中を勉強するには最適な場所。

歪みも闇も、目の前で繰り広げられる現実がそれ。

けれども、人生設計は成り立たない場所。

とりあえず食べていくことはできても、旅行や高い買い物はできない。

結局は僕が選んだわけだから、僕が責任を取る。

それが自由な世の中なのだから。

そういう都合の悪い現実を忘れるように僕は仕事に夢中になった。

文書の管理や役所への届出から電話応対まで。

必要なビジネスマナーやハウツーに関する本を、夜な夜な読みあさった。

少しでも、同期との差を埋めるために、僕はできる限りの努力をしたい。

そうでもしなければ、不安で仕方がない。

その不安を拭い去るために、また必死になって仕事をする。

そんな毎日の繰り返しを、僕は小さなプレハブで続けている。

第五節 生きられる幸せ

仕事がひと段落した昼には、必ず外の景色を眺めることにしている。パソコンの画面や書類を見続けていると、目が疲れて視力が低下する。

今はまだ、視力もあつて、手足が動いて、なんとか人並みの仕事はできる。

なのに、これが一つでも欠けたら、僕は一瞬にして人生を失うかもしれないという恐怖。

怪我をしたり、病気になったりしたら、僕はこの会社に居られるだろうか。

余剰人員ゼロのこの会社で、手負いの兵隊を養う体力はないのだから。

そう思うと、急に自分の体を大事に思うようになる。

ちよつと手を切っただけで、ものすごく心配になる。

そついうのを、心配症候群とでも言つのだらう。

けれど今は、自分が普通に生きていられることが、とても偶然のよつに思えてならない。

こんな小さな会社でも、僕が普通に生活できることが前提にあるから雇用してくれる。

その普通がなくなつたら、僕の生活はどうなるのか心配は尽きない。

僕の不安が増すにつれて、辺りも夏の装いになった。

真つ青な空に入道雲が一つ。

騒音はこの工場からだけで、操業が止まつた昼には、田んぼを吹き抜ける風が心地いい。

僕は田舎道の果てに幽閉される人生になった。

こつしている間にも、商談で飛行機に乗る同期がいて、家の中で悶

々とする人生と向き合う同期がいる。

どちらにしても人生に真剣で、僕はその夢中になるものがない。

人生というレースで、後続集団に取り残された僕に、巻き返すチャンスはあるのだろうか。

それでも、こうして地道に生きることが羨ましがる人もいる。

何階層も上からの命令に、ただ単に従うだけの毎日に嫌気がさしている同期がいる。

そうしてまた、仕事を投げ出すのだろうけれど、僕から言わせれば、随分もったいない話。

せっかく過当競争に勝って掴んだチャンスを、いとも簡単に手放すのは、僕には信じられない。

でも、そういう難しい人間関係の中にと、少し自由が欲しくなるのかもしれない。

自由も責任も少しだけで十分。

多すぎると持て余して辛くなるだけ。

今こうして、ベンチに寝転がって空を見ている僕は、人生の負け組なのだと思う。

いつも空は大きい。

いつも空は真っ青で、いつも雲は真っ白。

変わらないという普遍性は、いつも人に美しさをもたらす。

今日もこんなに空は大きい。

学生するときも、こんなに風景を眺めたことはなかった。

狭いところにいると、空の大きさを忘れていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2274f/>

置き去りにされても

2010年10月8日22時29分発行